主題
「平和を実現する人々は幸いである」マタイによる福音書5章9節

基本方針
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する

組織の課題
若い会員を増やし、意志決定機関に25%以上の若い会員を入れる

運動の課題
1. 憲法改悪を阻止し、第9条を世界平和の礎にする
2. 「核」廃絶と、自然エネルギー活用の運動を推進する
3. 子どもの権利を守る
4. 女性への暴力の問題に取り組む

YWCA 8 AUG. 2006

発行所 日本キリスト教女子青年会
〒102-0074
東京都千代田区九段南4-8-8
Tel. 03-3264-0661
E-mail. office-japan@ywca.or.jp
編集発行人 青木恵子
振替 00170-7-23723（毎月1日発行）
定価1部 150円
年間購読料2,200円（送料込）
www.ywca.or.jp

東北アジアの平和のために

池明観

ち みょんくわん

1924年平安北道生まれ。朴軍事独裁政権化、民主化運動の知的文化人を結集。身の危険から米国留学を経て、1972年来日。1993年帰国まで東京女子大学教授。専門は近代思想史。雑誌「世界」（岩波書店）に1973年から1988年までの15年間、「T・K生」の筆名で「韓国からの通信」を掲載、韓国民衆運動に多大な貢献をした。帰国後は、日韓共同歴史研究委員会韓国側座長、韓国文化交流政策諮問委員長、翰林大学日本学研究所所長等の要職を歴任、日韓交流の礎を築いた。03年5月までKBS（韓国放送公社）理事長。

昨日7月5日、北朝鮮が発射した7発のミサイルは世界を騒然とした雰囲気の中にまきこんでしまいもその国は核兵器を所有しているとなかば世界を脅迫しているかのようである。

1947年3月、私は当時の南北分断線、いわゆる38度線を越えて南、韓国に南下してきた。米軍占領下にあった南には北とは違って民主主義が花咲いているだろうと思ってであった。

しかし現実はそれほど生易しいものではなかった。そのため逃避的な心情でキルケゴールの哲学にふけったことを思い出さざるをえない。その中で1950年には朝鮮戦争を迎えて最前線に立った。

このような経験から、私の心の中に東北アジアの平和への願いが芽生えたといえるであろう。

これと関連して二つの事柄に言及することは意味があることかもしれない。私は1998年から数年間、日韓の大衆文化の交流に関する委員会に関係してまた2003年には北朝鮮を訪問する機会に恵まれた。

いま日韓関係は政治的には冷え切っているといわれる。しかし日本における「韓流ブーム」と呼ばれる文化交流には、過去に比べると目を見張るものがある。すでに日韓の間では1日1万人を超える人々の往来がある。そこには政治を超える市民の時代がきているといえるかもしれない。これは日韓の間だけのことではない。日・中・韓ともにそのような時代を切り開きつつある。あまり政治に一喜一憂してはならない。

もう一つ、北朝鮮を訪ねたことにも少し触れてみたい。それは1週間、ホテルと会議場を往復する日々で、北朝鮮の市民一人とも接触したり自由な会話を交わすことのないものであった。遠くに眺める人々と景色は悲しく写るだけであった。これが半世紀を超えて目にした故郷であるのかと涙した。このような状況の中で何をなすべきか、何ができるかを考えざるをえなかった。

東北アジアの平和のために何をなすべきか。これは私個人のはしたない考えに過ぎない。何よりもそこに住む一人ひとりの生命について考えてのことである。まず食べて生きること。そして置くこと。まず食べて生きられる原初的な生への配慮。このやさしさが今いかに世界的に必要なことであろうか。

年老いたせいであるかもしれない。日韓関係における紆余曲折にあまりにも悩まされてきたのかもしれない。政治は短く歴史は長いと思うのである。政治に翻弄されてはならない。民主的政治であるならば、一人の政治家の統治期間は長くて4～5年に過ぎないではないか。歴史の単位を100年以上と考える歴史家の見方が市民的良識のためにもっと動員されなければならない。

東北アジアの平和のためにどのように考えるべきであろうか。西欧の力が近代に及ぶにつれて日本は力をつけてアジアへと進んだ。これはある意味ではヨーロッパにおけるドイツの場合のように文化の伝承のある国々への侵略であった。

そこで文明が大陸から日本へという従来の道は逆転して日本から大陸へと変わった。それまでの古き東北アジアの秩序は中国を頂点としたものであったとすれば、近代のそれは日本を頂点としたものになったといわねばなるまい。

1945年、この秩序が崩れて以来、東北アジアは新しい秩序を探し求めてきたともいえよう。その後、日本の復興があったかと思うと、韓国の再建があり、今は中国が大きな発展のきざしを見せている。東北アジアは新しい秩序を求めているといわざるをえない。それは決して階層的な時代ではあるまい。我々に求められているのはまず日・中・韓の間におけるバランスの取れた平和であろう。支配ではなく協力であり、ダイナミックな競争をくり広げながらも協力するということであろう。

そして周辺にある国に支配の手を伸ばすのではなく、彼らとの間でも協力を導き出すことに違いない。そのためにまずに我々の間には東アジア共同体の構築という声が聞こえているではないか。これは一国優位の支配の秩序ではなく日・中・韓協力という対等な秩序である。そして東北アジアの他の国々もこの体制の中で同様に競争しながら協力する平和の秩序である。

この歴史の過程が今、大きく動き出していると見たい。それはあまりにもばら色の夢に彩られているといわれるかもしれない。しかし歴史への楽観なしには行動は生まれない。日本が戦後の廃墟から立ち上がった時の教訓に学びたい。その日本に限られたビジョンを東北アジアに広げることを歴史は望んでいるかもしれない。それに応え、それに成功するためには近代における東北アジアの先進国である日本のイニシアティブが大きな意味をもっているのではなかろうか。東北アジアにおいて東北アジアとともに生きる日本である。

すでに日本の戦後の再建と発展は東北アジアのモデルであり、実際それは東北アジアの国々の発展に寄与した。それが東北アジアの諸国において正当に評価されていないのも事実であるが、文明の模倣ではそのようなものであろう。今それを自覚的に意識に取りもどすことは東北アジアの共同体の構築にとっては貴重なことであるかもしれない。聖句をひとつ思い起こしたい。

「義の実は、平和を実現する人たちによって、平和のうちに蒔かれるのです。」（ヤコブの手紙3章18節）

（2006年7月6日）

魂の赴く道

実生律子

自民党「新憲法草案」には「自衛軍」「軍事裁判所設置」が明記され、また教育の現場ではすでに統制が始まり、改憲のための「国民投票法案」が制定されようとしている。更に日米両政府は在日米軍再編に最終合意した。これが実行に移されると在日米軍基地の機能強化・恒久化は必至であり、繰り返し起きている基地周辺での女性に対する暴力や騒音・事故などの増大も明らかである。大きな力によって、小さな人の命が奪われその叫びも聞かれないこの現実を前にする時、国家体制に迎合しつつ「私の平安」を享受し続ける自分の姿が見え隠れする。

私の属する教会では、高里鈴代さん（「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」共同代表・沖縄YWCA会員）の講演に触発されて「沖縄の会」が誕生し6年になる。毎月勉強会を重ね、その瞬間にも闘い続けている人たちがあることを決して忘れることがないようにと祈る。中には辺野古の海上新基地阻止活動へと押し出された人もいる。そのグループでさえ「7・7シンポジウム」（07年参議院選挙で、平和憲法を守り抜くことを最優先する平和共同候補の実現を目指す集会）の呼びかけ人となることを提案したところ引き受けた人は半分以下であった。実にこれも一つの現実である。

自分の日常のありようが、エレミヤ書6章16節に思いを馳せた詩人の歌「道」に近づくものであれと切に祈る。

すべての人に道が開かれる　何本かの道が
気高い魂は高い道を登り
卑しい魂は低い道をたどる
その間にあって　霧に包まれた野原を
残りのものがそこここに漂う
しかしすべての人に
高い道と低い道が開かれる
そしてすべての人は魂の赴く道を決める

（日本YWCA常任委員）

エンパワーするNGO YWCA

アクションアラート パレスチナYWCA

世界YWCA、およびパレスチナYWCAからの緊急行動の呼びかけ（2006年7月7日）

2006年6月25日以来10日以上もの間、75万人のパレスチナ人が生活に必要不可欠な水・電気を使うことができない生活を強いられています。1人のイスラエル兵の拉致の報復としてイスラエル軍が行ったミサイル攻撃によって、ガザ地区唯一の発電所と3つの橋を破壊したためです。その結果、ガザ地区のすべての住民が世界中から孤立しているのです。これはガザ地区の住民への集団処罰に値し、国際法に違反する行為です。電力はガザ地区の上下水処理や医療に不可欠なものです。

戦争に関する法律は「一般市民が生存のために欠かすことのできないもの」への攻撃を禁止しています。イスラエル軍によるガザの発電所の破壊は生活基盤を保護する義務に違反しています。イスラエル軍は2005年に撤退し、イスラエル人入植地を撤去しましたが、ガザを占領し続け、ガザの国境・海域・制空権・税収入・設備・国際経済すべてを握っています。それなら少なくとも、イスラエルはガザの住民の基本的な福祉を守る責任があります。特に、イスラエルがガザ地区に課した制限によって影響を受けている健康・教育・人道上のニーズに対して責任があります。

イスラエルはパレスチナ人の都市・村・難民キャンプまでも侵略し、適切な裁判手続きもなしにパレスチナの市民を投獄しています。このような暴力で、罪のない市民、特に女性や子どもは生きるために必要な基本的なニーズを得られず、日々の暴力によるトラウマで苦しんでいます。6月25日以来40人の住民が殺され、175人が負傷し、そのうち45人は子どもでした。私たちは、平和・正義・安全を決してもたらすことないすべての暴力行為を強く非難します。

パレスチナYWCAは世界中のすべてのYWCAに次の行動を呼びかけます。

1．国際法を遵守し、ガザ地区の住民とガザ地区の生活基盤への攻撃を直ちにやめるよう国際社会に求めること
2．イスラエルが無差別集団処罰をやめることと、ジュネーブ条約に従うことを要求すること
3．不正に拘束されている9600人（うち400人は18歳以下の子ども）にものぼる政治犯を解放し、国連子どもの権利条約を従うことをイスラエルに要求すること
4．違法に拉致され投獄されている、民主的な選挙で選ばれた64人のパレスチナ自治政府の大臣とパレスチナ自治評議会のメンバーを直ちに釈放するよう要求すること
5．イスラエル兵を安全に家族のもとに帰還させるよう要求すること
6．聖地の公正で持続可能な平和の実現に向けて、国際社会、特にジュネーブ条約の調印国が、イスラエル政府とパレスチナ自治政府間の対話を促すよう求めること
7．2003年ブリスベーンでの世界YWCA総会で採択された「中東地域の自由と尊厳に関する決議」を実行すること

東京YWCA 武蔵野センター チェルノブイリの祈り

自著のサインに応じる神田香織さん

東京YWCA武蔵野センターの「暮らしを考える会」では、長年、自分たちの身の回りのことから生活を問い直そうと勉強を続けてきたが、その中でもエネルギー問題・原発問題は大きな課題のひとつである。

昨年NCC主催のチェルノブイリスタディーツアーで、講談師の神田香織さんとご一緒したことから、チェルノブイリ原発事故から20年目の今を地域の方と共に考えたいと、6月24日に「チェルノブイリの祈り」と題した催しを武蔵野公会堂で行った。

前半には、今年の3月にも現地を訪れたフォトジャーナリストの広河隆一さんがチェルノブイリ原発と周辺のスライドを映しながら話をされた。広河さんは原発事故のため消えてしまった村々を今までに458所撮影したが、それでもまだ100以上消えた村があり、その村の人たちが強制移住した地域では今でも人々患者が多発しているという。事故の死者として公式に発表されているのは64人のみ。

どんな消火剤によって鎮火したのかさえ公表されず、放射能を完全に防ぐことができる防御服などないとの話も、次に事故が起きたときに誰がその処理に当たるのかを考えると恐ろしくなる。自衛隊は放射能の危険があるところには派遣されないとの話も驚きだった。

神田香織さんの立体講談はスベトラーナ・アレクシェービッチの『チェルノブイリの祈り』という本の中から、真っ先に消火活動に飛び込んで被爆した消防士とその妻の話を照明と音響を加えて講談に書き起こしたものである。事故の後、献身的に看病を続けて、刻一刻変わり続けていく夫を看取った消防士の妻は、身ごもったおなかの子どもまでも失ってしまう。その妻が生きるためにとった道は新たな命を育むこと。身勝手にも思えるその行為を、生まれてきた息子は理解し受け止めている話に、私たちが後代に残すとんでもない負の遺産のことを私たち自身がもう一度立ち止まって考えなければならないと切に思った。

東京YWCA 梶山順子

本の紹介

「脱原発への道 キリスト者の視点で考える」

発行：日本キリスト教協議会 平和・核問題委員会
（TEL03・3203・0372 ncc-j@jca.apc.org）
頒価：300円（送料別）

55ページという中で、核の歴史と日本の核政策の現状を、国際情勢とからめながら、分かりやすく具体的に語っている1冊。読み終えると、何かしなくちゃと思わせられるのは、弱者の立場、とりわけこれから生まれてくる子どもたちの思いにまで想像力を働かせ、人類の進むべき方向を示しているからだろう。「小欲知足」の道を歩み、原子力にブレーキをかけ、決してあきらめないで、持続可能な社会と平和な世界を創ろう！と呼びかけている。（J・T）

ジュネーブ便り 世界YWCAインターン記③ ～評価の夏～

こちらに来て早くも約半年が経ちました。そこで先日、スーパーバイザーとの、半期評価ミーティングがありました。これに先立ち、自己評価表を作成し、客観的に自分を見直してみました。評価表を埋めるまでは英語で仕事をするという新しい環境で、どれだけのことができたのか不安ではあったのですが一通り埋めてみると、結構さまざまな仕事を、マイペースながらこなしてきたのだなという感想を持ちました。自分が出来たこと、出来なかったことを知ることは、今後の指針を考えるよいきっかけとなりました。

「評価」といえば、この夏は、世界YWCAは、来年の世界総会に向けて、過去4年間の各国YWCAの活動動向をまとめる重要な時期となっています。私の目下の仕事は、各国から続々届く調査回答をデータ化し、評価レポートを書くということです。こちらも、達成事項・改善事項を洗い出し、今後の活動に対して効果的な提言ができればと考えています。私の夏は、データベースとにらめっこの夏となりそうです。（世界YWCAインターン　福嶋由里子）

ご協力ありがとうございます
賛助費（以下敬称略）
大里喜美子　栗原佐千子　甲子雅代　武藤ハツエ　吉行あぐり　原田由美子　小塩トシ子　星野千枝　岩橋百合　諏訪明子　平山芳子　小谷野淳子　白井悠子　叶路子　村井眞子　原美子恵　汐崎貞子　片山恵　布村美弥子　天野洋子　川上里子　平岡千代子　三浦惠子　堀江宣子　和田千鶴子　萩原博子　渡辺立子　北垣喜子　森際眞知子

一般寄付
酒井真紀子
オリーブの木募金
広島YWCA
パレスチナYWCA支援募金
広島YWCA
世界YWCA賛助費
大里喜美子　江副雪子
ジャワ島中部地震緊急支援募金
田中美智子　小室京子　武田雪貴代　甲府YWCA　浦和YWCA　訓路YWCA
神津厚子　小出啓子　内海公子　山瀬賢代　秋田稔　滝口禎子　篠眞紀子　平栗彩子　鴨打美喜　寺島順子　井出すみ　樋口美枝子　長澤子　庄子泰子　具島美佐子　山田宏子　松本京子　岸田晃子　渡辺順子　小林多美　小林和人　永島純雄（故永島郁恵兄天記念）　服部薬　髙木久子　髙田三世子　坂上信子　網美津保　西田スエ子　鴨打美喜　寺島順子　馬場愛子　帆足道子　井出すみ　樋口美枝子　長澤子　庄子泰子　具島美佐子　池上幸子　三股まさ子　安倍愛子　李仁夏　榎本富美子　長尾真理子　野村紀昭　長尾真理子　浦田伸子　宗像佐智子　北村和子　松川和泉　伊東きよめ　高橋須賀子　八木亀子　武井真美子　石川和子　佐々木貴子　林俊子　鎌原恵子　村上保子　廣田容子　安武留美　礪貝晴子　野崎文子　辻副雪子　小野寺恵子　徳光美奈子　鴨康子　馬上貴美子　井沢須美子　布村圭子　寺島明子　柴沼喜久子　本行雅子　宮澤玲子　金子宏子　森晶子　有賀三奈子　杉田佐紀子　伊藤いく代　大川孝子　仙波節子　佐渡スズ　宮原栄子　服部友子　川村悦子　鈴木玖仁子　萩原正　水野智子　太田和子　渡辺美惠子　古銭ミネ　谷山幸子　板橋俊子　斎藤佐智子　今井美令　篠原洋子　横山キミイ　岩崎妙子　上原睦子　斎藤佐智子　今井美令　篠原洋子　横山キミイ　岩崎妙子　下村泰子　水野智子　香川博司　松下信子　吉森美秋　大澤恵美子　坪田未沙子　小川碧　須部道子　伊藤いく代　大川孝子　仙波節子　佐渡スズ　宮原栄子　服部友子　川村悦子　鈴木玖仁子　萩原正　水野智子　太田和子　渡辺美惠子　古銭ミネ　谷山幸子　板橋俊子　斎藤佐智子　今井美令　篠原洋子　横山キミイ　岩崎妙子　下村泰子　水野智子　香川博司　松下信子　吉森美秋　大澤恵美子　坪田未沙子　小川碧　須部道子　堀口千恵子　尾名高貞子　永山峰子　田沼祥子　長塩敬子　永山峰子　田沼祥子　小出貴美　柳沢道子　松井伊津子　祝父江浩子　押渕礼子　火浅江浩子　吉羽康子　岩田陽子　宗重喜久子　山口佳子　森克子　仁科謙太郎　牛島美子　中島潤子　仁田裕子　武内雪貴代　中橋美鈴　実生律子　江尻美穂子　大野美知子　泉和子　木下由美子　稲垣美弥子　大塚シゲ　山口佳子　土屋幸子　稲垣和寿子　淀川敬子　森克子　仁科謙太郎　仁科弥生　五十嵐康子　小貫ツヤ　田崎桂子　渡辺和美　浅田和美　近藤真由美　堀口千恵子　今井栄　須部和子　深田光代　原田早苗　武藤久子　野呂幸子　向後理恵　正田京子　小島真美　藤原珍子

特集

軍隊は住民を守らない

ブッシュ米政権は、東西冷戦型だった駐留米軍の配置をテロなど「新たな脅威」に対応する陣容に整え直すとして、世界的規模での米軍再編を進めています。これを受けて、小泉内閣は、戦後最大規模といわれる「在日米軍再編計画」を米国との間で合意しました。再編対象となる地元の意向を無視し、基地強化につながる動きです。

「米軍再編」よりも たしかな安全保障をめざそう

田巻一彦（ピースデポ理事）

沖縄での監視行動 （撮影・大城美代子）
写真上・頭上を飛ぶF15戦闘機
写真下・嘉手納基地側の通称「安保の見える丘」で

5月1日、日米政府は、在日米軍再編協議に関する「最終合意」と「ロードマップ」を発表した。

まず、沖縄の「負担の軽減」について5つのことが合意された。①2014年までに普天間飛行場（宜野湾市）を返還する。代替施設をキャンプシュワブ（名護市）の沿岸部に建設することが条件。②海兵隊を、同じく14年までにグアムに移転する。移転規模は軍人8000人と家族9000人。費用の59%にあたる約7000億円は日本が負担する。③以上の①と②が実現すれば本島南部の6つの海兵隊基地を返還する。④嘉手納基地とキャンプハンセンをそれぞれ航空・陸上自衛隊と米軍が共同使用する。⑤嘉手納の戦闘機訓練を本土の自衛隊基地に分散移転する。

①～③のカギは、日本のお金だ。日本がグアム移転費用と普天間代替施設の建設費用を負担しない限り、グアムには行かないし普天間も返還しない。米国は「負担軽減」を人質に、新しい基地と太平洋の海兵隊の再配置を、日本のお金で手にいれる。

●

本土の基地も大きく変わる。①厚木（神奈川県）の空母艦載機の訓練を岩国（山口県）に移転する。岩国にとっては迷惑もない「負担増」だ。②キャンプ座間（神奈川県）での陸軍司令部の改編。③横田（東京都）には、日米共同運用調整所が置かれる。④車力（青森県）には、ミサイル防衛のための「Xバンドレーダー」が置かれる。追尾するのは日本を攻撃するミサイルではない。車力はアジアのどこかの国から米国を目指して飛んでいくミサイルのコースのすぐ傍にある。そして「再編協議」とは別枠で協議されてきた重大かつ危険な計画として、⑤横須賀への原子力空母の配備（08年）がある。

●

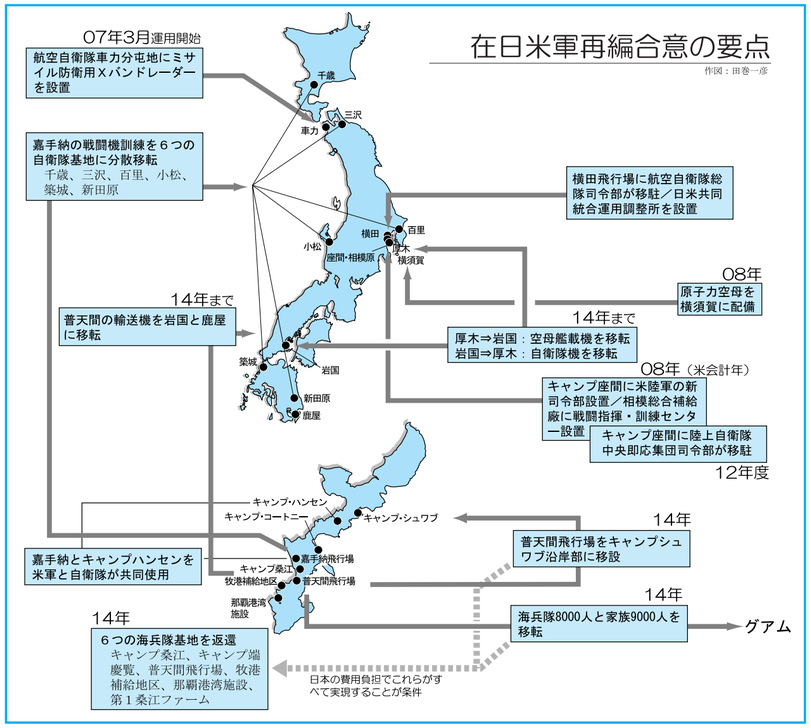
このように、今回の再編合意は、「負担の軽減」を大義名分としながら、その実、米国の戦略的要求にそった「基地強化」の合意と呼ぶべきだろう。そこには自衛隊と米軍の協力の深化という付加価値までがつく。地域から問いかけられるものをキリスト者として深く受け止め、神奈川の基地反対の運動につなげ

●

6月28日の日米首脳会談で発表された共同声明の一節は、「両リーダーは、〈米軍再編〉合意の完全かつ速やかな実施は、日米両国のみならずアジア太平洋地域の平和と安定のために必要であるという意見の一致をみた」と述べた。これを民意に反する再編計画を実行する日本政府の「本気」に対する米側の不安の表れと見るむきもある。名護市辺野古沖合への普天間代替施設建設を含む沖縄の基地返還計画が「SACO合意」としてまとめられたのが96年12月。それから10年近くたった今も合意の多くは実行されていない。「SACO合意」と今回の「最終合意」は、人々の意思に反していること、米国の軍事戦略上の都合を最優先していることにおいてまったく同じ問題を抱えている。だから、今回も合意が本当に実行されるかどうかは灰色だ。だが実行されなければ沖縄の負担はなおも続くことになる。

●

この堂々巡りから脱する道はないのだろうか。それは可能だ。在日米軍の総量を縮小するための対米交渉と、米軍の縮小を可能とする協調的な安全保障環境を築くアジア外交によって、私たちは活路を見出すことができる。これらは小泉政権4年間で一度も省みられたことのない、重要な仕事である。



「無関心」「他人事」を問う
――「沖縄の負担軽減」の嘘

「在沖米軍基地再編は沖縄の負担軽減」との政府発表に唖然とし、憤りで胸が張り裂ける思いです。実際は米軍基地の強化・要塞化を図るものでしかありません。人口密集地にあり古くなった基地を、最新鋭でかつ人目につきにくい場所に建設し、その費用も日本が負担するという、米軍に至れり尽くせりの計画です。

負担軽減の最大の目玉とされる「海兵隊員8千人のグアム移転」。在沖海兵隊員の人数は、日本政府の説明では「米国防省から1万8千人と聞いている」になっています。しかし、沖縄県が毎年行っている調査では、2005年9月現在1万2530人です。削減の分母が大きく違います。司令部要員がいくら か移っても、グアム・沖縄間は飛行機で2時間、戦闘機だともっと速い、通勤距離です。しかも、実戦（戦闘）部隊は沖縄駐留のままです。

「目玉」はすべて、辺野古岬への新基地建設とパッケージになっており、建設が進まないと何も動きません。新基地は、滑走路をV字型2本とし、着陸用と離陸用に分けるので、住民地域を飛ばないという政府の説明は明らかに嘘です。戦闘機は離着陸訓練が必要で、それは1本でしかできません。旋回訓練は？　ヘリコプターは全方角へ飛びます。嘉手納基地の米軍と自衛隊との共同使用・迎撃ミサイルパトリオットの配備計画など…。政府が公にしないまま、どんどん基地が強化されていく。これで、負担軽減でしょうか。

市街地のど真ん中にある普天間基地は、即時、代替なしで返還すべきです。1974年に日米で返還合意した那覇軍港。ほとんど稼動していない状態なのに返還されていません。

○

戦後61年、沖縄は基地返還を訴えつづけて闘っているのに、なぜ実現しないのでしょうか。基地問題は沖縄問題ではなく「日本の討路」そのものが問われているのに、日本国民の多くが「無関心」で「他人事」としているからです。

今回の再編による辺野古への基地建設は、米軍が1966年に計画していた案と場所形も酷似しています。40年も前です。当時、米国はベトナム戦争で経済的にひっ迫しており、沖縄の反基地感情の高まりもあり、建設できる状況になかったといえます。軍事は長いスパンで事が進められます。

沖縄戦も、実際の戦争は1945年ですが、遡ること31年も前1914年に日本陸軍は沖縄戦を想定した訓練を行っています。沖縄戦体験者は「戦争するんですよ。私たちにはわかります。当時と同じですから」といわれます。

今、「軍隊は住民を守らない」という沖縄の常識を覆し「日本

2001年5月。景気をよくするために、どんどん原子力発電所を作ってどんどん電気を供給しよう、というブッシュ米大統領のエネルギー政策に反対してカナダで「自主停電運動」が起こりました。この流れを受けて日本のNGOが2003年6月22日（夏至）に、「100万人のキャンドルナイト」を始めました。夏至の日の夜8時から10時まで、電気を消そうとの呼びかけに、昨年は全国で2万2716箇所の施設がライトダウン、登録イベント数は311、約664万人が参加。今年は韓国でも初めてキャンドルナイトのイベントが開催されました。ここでは札幌YWCAのキャンドルナイト・フルートコンサートを紹介します。（編集部）

キャンドルナイト・フルートコンサート in 札幌YWCA

夏至の日の前日、札幌YWCA「Y's Café」でキャンドルナイトが開催されました。フルートとピアノの演奏。フルートの息づかいがきこえてくる距離で想い想いに耳を傾けました。そして、童話『むぎばたけ』の朗読。絵が見えない分、想像しながら聴く物語は、自分も絵本の中に加わるようです。

ろうそくの灯りのもと、32人の人たちが集い静かな時間を共有する。それだけのことがなんて贅沢で特別なんだろう…。炎のゆらぎに優しく癒された夜でした。 （山上左恵子）

4市（横浜・湘南・浦和・平塚）YWCA 沖縄デー
沖縄と神奈川を結ぶもの

昨年の沖縄デーでは辺野古でのA1で毎月のカンパを続けてきた。今年は、「米軍再編」によって神奈川も含めて日本各地の基地がアメリカの思惑によって強化・固定化されようとしている厳しい現実を考えることにした。辺野古に度々出向いて、そこから問いかけられるものをキリスト者として深く受け止め、神奈川の基地反対の運動につなげておられる菊池礼子・高座渋谷教会牧師を講師として迎えて、「日米軍事再編と私たち―沖縄と神奈川を結ぶもの」をテーマに、6月10日（土）に横浜YWCAを会場にして、24名の参加で今年の沖縄デーを開催した。

菊池牧師は昨年の秋以来、教会の女性たちと週1回厚木基地前で「基地はいらない」と書かれたひざ掛けを広げてベンチに座る運動を続け、最近は地元の人たちも加わって月1回のデモができるようにもなったとのこと。

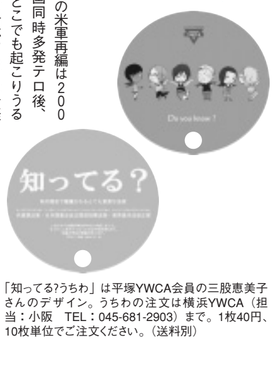
ビデオ「米軍の再編」を観て、講師から日米両国の軍事的一体化がどのような勢いで進んでいるかを克明な数字をあげた説明を受けた。

世界規模の米軍再編は2001年の米国同時多発テロ後、「世界中のどこでも起こりうるテロに直ちに対応するには身軽な編成に衣替えする必要がある」として進められてきた。在欧州米軍は、人員を40%（4万人）、施設を37%削減。逆に北朝鮮・中国をにらんでアジア太平洋方面では、米太平洋軍を再編し、東アジア・東南アジアに緊急展開できる体勢を構築する。グアムは西太平洋の中心に位置し、ハワイ・中国・東南アジア・東京・沖縄とほぼ等距離にある。沖縄の海兵隊8000人がグアムに移動するのは米軍の戦略拠点の強化以外の何ものでもない。その移転費用を含めた在日米軍再編にかかる日本側負担は3兆円ともいわれ、国民1人当たり3万円の負担である。一方ドイツからの米軍撤退はすべて米軍負担である。

○

午後のグループ討議には若者のグループができたことは何ともうれしいことであった。その中からの提案を受けて、8月26日（土）に浦和・関内・藤沢の各駅でピースアクションを行うことになった。ミニ団扇「知ってる?うちわ」には秋の国会で審議されようとしている危険な法案の名前を挙げ、ポストカードには「米軍再編の危険性」を数項目挙げて作ることにした。

平塚YWCA 三股まさ子



「知ってる?うちわ」は平塚YWCA会員の三股恵美子さんのデザイン。うちわの注文は横浜YWCA（担当：小阪　TEL：045-681-2903）まで。1枚40円、10枚単位でご注文ください。（送料別）

軍の名誉を回復」する旨の裁判が、大阪地裁で係争中です。被告は岩波書店・大江健三郎さん。元軍人と遺族らが原告です。歴史に学び、現在を未来を紡いでいきたいと思います。

沖縄YWCA 大城美代子

種

1991年私はタイから帰国しました。当時京都YWCAのAPT（Asian People Together）が、外国人のための電話相談を始めた頃でした。私はそのメンバーになり、支援の現場にでかけて行きました。交通事故で腕を骨折した女性、タイ人コックの賃金カット問題、タイ人によるママ殺し事件などでした。直接会って相談にのり、警察・入管・弁護士事務所・拘置所・裁判所に行きました。ここに挙げただけでも外国籍の人々の置かれている厳しい現実が見えてきます。

その後、「女性の家HELP」（日本キリスト教婦人矯風会）のディレクターとして、夫からの暴力（DV）で逃げてきた女性と子ども、及び人身売買の被害者となった女性たちを支援してきました。最近、外国籍の人に対して入管や警察の厳しい対応がなされています。日本人夫の暴力で避難した女性が、夫が在留資格の手続きをしないためにオーバースティになり、シェルターにいるにもかかわらず警察に逮捕される事件がおきました。彼女は犯罪者ではなく、DVの被害者です。

イエスは、私たちの周りで傷つき倒れている人に対して、私たちに、あなたは隣人であったのかと問うておられます。

大津恵子（「女性の家HELP」前ディレクター）

「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい」 （ルカによる福音書10章27節）